心肺蘇生法に神様は必要か？

「おい、本当にこっちで合っているんだろうな？」

　走りながら俺は、バッグの中の妖精モドキに話しかける。

　先程から、こいつの言葉に従って走っているのだが、どうも『敵』っぽいやつの姿が見えないのだ。

　商店街の、店と店の合間の薄暗い通路を通り抜け、気が付けば俺の通っている学校の近くまで来ていた。ここまで来れば流石に見晴らしは良く、俺にも『妖精モドキが感じた気』の持ち主の姿を目視しても良さそうなのだが……今、俺の眼前を埋めるのは、青い空と学校の校舎、そして申し訳程度の自然だけである。

「ええ。間違いありません。あそこの中にいるはずです」

　いつの間にかバッグから外へ出ていた妖精モドキが指さした先は、学校だ。

「おいおい……マジかよ」

　今日は土曜日。休日とは言え、体育会系の部活がグラウンドや体育館を使っているだろうから、入れないということはないと思うのだが……それはつまり、昨日出くわしたようなやつが、今、校内をうろついているということでもある。

　人の気配を感じたのか、妖精モドキも苦い顔をしていた。俺と同じことを思ったのだろう。

「……おい、どうする？」

「本当なら、瞬様以外のこの世界の人々を巻き込みたく無かったのですが……やむを得ません。まずは、ここにいる方々を避難させましょう」

　同感だ、と言うように俺は頷き、校舎の校門をくぐる。

「……あれ？」

　だが、そこで俺はふと気がついた。

　人の声が聞こえないのだ。休日に学校に来たのは、これが初めてだから何とも言えないのだが、普通なら、体育館やグラウンドから、体育会系の部活特有の、熱い掛け声が聞こえてきそうなものである。だが、玄関に入った俺達を迎えたのは、気味が悪いほどの静寂だった。

「どうかされましたか？」

　妖精モドキが、異変を感じた俺に気がつき、そう声をかけてきたので、俺は思ったことを話す。

「ふむ……一応、瞬様と同じような気配なら、向こうの方から感じますが……」

　首を傾げながらも見つめたのは、二階の突き当たりにある部屋の辺り。丁度、教務室がある場所だった。

　俺の通っている高校は、生徒数が尋常じゃないほど多いだけあって、恐ろしく広い。上から見ると、校舎はO型になっており、その後ろには、文化系の部活の部室がある部活棟、そして校舎と部活棟をぐるりと囲むように、体育館が四つある。

　それだけでも充分広いのだが、さらにその後ろには、校舎の占める面積の倍はあろうかというほどの広さのある『第一グラウンド』があるのだ。加えて、『第一グラウンド』から少し歩いた先には『第二グラウンド』なるものがある。一体何に使うんだ、と聞きたくなるが、体育会系の部活に入っているやつに言わせれば、まだそれでも足りないんだとか。

　休日に、どれだけの部活が練習しているのかは知らないが、結構な数になるのは想像に難くない。それが一箇所に集まっているのだから、予想できるのはただ一つ。

「避難はしているみたいだな……まあ、昨日のあいつみたいなやつが学校に侵入してくれば、当然逃げるか」

　教務室も決して狭くは無いのだが、そこに、体を動かし汗にまみれたであろう高校生が集まっていると考えると……中々に地獄だ。

「では瞬様。ここにいる方々を避難させるのは……」

「大丈夫だろう。お前の『敵』は、向こうなんだろう？」

　そう言って指さした先は、校舎と部活棟の間の辺りだ。妖精モドキ曰く、どうやらそこに『敵』はいるらしい。

「なら、わざわざ危険を犯して、外に誘導する必要はないさ。教務室にいれば、安全っちゃ安全だろうしな。死人もいないようだし」

　頷いた妖精モドキにそう言ってやると、こいつは息を吐く。「この世界の方々を巻き込みたくない」という言葉は本当のようで、一先ず安全が確保出来たことに安心したらしい。

　ちなみに『死人がいない』と判断したのには、理由がある。

　廊下が綺麗なのだ。まさか床に溢れた血を綺麗に拭き取ったわけではあるまい。それに、もし死体が転がっていれば、少なからず死臭はするだろう。

　まあ勿論、校舎が広いが故に、単に俺達が気づいていないだけかもしれない。それに、『敵』が超能力的な何かを使って、血が出ない殺し方をしたかもしれない可能性もあるので、まだ完全に安心するのは早いのだが。

「よし、行くか」

「ええ。さっさと倒してしまいましょう。瞬様、頼みますよ？」

　妖精モドキの言葉に、俺は黙って頷く。そして、恐らく『敵』がいるであろう場所に向かって走り出す。

　一応、心臓をどういう風に止めるかは考えてある。

　昨日のあいつを見た限り、恐らく知性は低くはないが、決して高いとは言えない気がした。確かに戦闘能力は俺の方が圧倒的に劣るし、勝つことは出来ないだろう。

　だが、記憶を探ってみれば、あいつの攻撃自体は単調なものだった気がする。しかも、飛び道具のような物で攻撃してくることも無かった。

　ならば、腕の長さから大体の攻撃のリーチを予想して、当たるか否かの距離を保てばいい。多分、一発で仕留めようとするだろうし、攻撃が来るタイミングで後ろに下がれば、上手いこと心臓が止まってくれるだろう。万が一タイミングをミスっても、ギリギリの間合いなら死ぬこともあるまい。本当にヤバければ、妖精モドキも何か警告を発してくれるはずだ。もし相手が武器とか持っていたら、一旦逃げて、作戦を練り直す。昨日も暫く逃げ回れたし、今回も大丈夫だろう。

　俺は心の中で、自分の作戦をもう一度確認して、確かに、「大丈夫、問題は無い」、そう思っていた。

　だが、この時の俺は肝心なことを失念していた。

俺の作戦は、あのテュポーンと同じような敵を想定したものなのである。相手に大した知性は無い。そういう前提で立てた作戦だ。

　だから――

「やはり来たか……と思ったが、これは驚いた。人間まで一緒とはな」

　まさか、これから戦う『敵』が、人間や妖精モドキ並……少なくとも、言葉を話せる程度の知性はあるような、そんな相手だとは思ってもいなかった。